

内館牧子の

あした
明日も



図書館で借りる。話題の本は百人単位で待っている。こんな時代である上に、『100人の物語』は、秋田に特化した地味なジャン

やがて、この本の良さに目を止めたNHKテレビの『首都圏ネットワーク』や『ラジオ深夜便』、文化放送の『大竹まことザ・ゴールデンヒストリー』など、

と聞けばおとなし。獣のようにはなでる自分。分の心も、故郷のことを聞くとおとなしくなる。これ

と友人に聞いていたが、行ったことがなかった。以前に商工会議所報「あきた」でも紹介され、柳瀬さんの「もつとなく」さんの人達に秋田の食材の美味しさを知ってほしい。力を

段々、そしてスタッフの良さが揃わなければ、とても続くものではない。コロナも、客たちの励ましで乗り越えられたと、前出の会報にあった。

私と弟は千円で食べられるランチの秋田短角牛ハ

先日、一冊の本を読んだ。『首都圏在住秋田人 100人の物語』

その帯に書かれていた。『秋田ひえばなの会』の企画、出版委員会の発行で2017年に世に出た。

私が買ったのは、2019年に第2刷を出していたこと。つまり増刷である。

『首都圏で力強く生きて来た。ふるさとをよなく愛する秋田人たちの文庫です。』

故郷秋田を離れて、東京や神奈川県などの首都圏で生きて来た、そして生きていく方々の、一般大衆による

がどれほど至難か。本離れが進む時代であり、売れない。加えて物価高。日用品を売っただけで一杯で、本は

ルだ。そして書いているのは著名人ではなく、100人の市井の人々である。それが第1刷。1800円を出しても読みなくて、自分で取っておきたい本だったと思う。

さまざまアイデアが次々に取り上げ始めた。その効果が増進に影響したところもあるにせよ、遠い時代を思わせる写真も多く、作りがてきと裏である。何よりもこの文庫にも

いを、どれほど切なく美しく歌ったか、それは今でも人々を引きつける。その中で私が一番好きなのは「握の砂」にある一首。

asatte tanshie という。最初に聞いた時はイタリヤ語かと思ったところ。何と秋田弁で「上がってたんしえ」だった。オーナリーシェフの柳瀬一輝さんが秋田市出身という。東成瀬村の短角牛が絶品だ

と友人に聞いていたが、行ったことがなかった。以前に商工会議所報「あきた」でも紹介され、柳瀬さんの「もつとなく」さんの人達に秋田の食材の美味しさを知ってほしい。力を

段々、そしてスタッフの良さが揃わなければ、とても続くものではない。コロナも、客たちの励ましで乗り越えられたと、前出の会報にあった。

私と弟は千円で食べられるランチの秋田短角牛ハ

『100人の物語』

<第1、第3日曜日に掲載>

脚本家、秋田市出身

©秋田魁新報社